しまして、教育者自身が先づ此の境に至りまして教育する事だけは、どうしても必要な事と存じます。そしてもつと趣味のある信念の堅い國民を養成する事は、現代に於て最も急務である樣に存じます。殊にこゝに進むのに、比較的都合のよいのは、文科で御座いますから、私共は微力魯鈍に鞭ちながらも、大いに心しなければならない事と存じます。そして進んだ人類として、大國民として、もつと充實した、熱烈な、歡喜に充ちた、境遇にまで人々を導きまして、最美しいもの大いなるものを生み出す國民を作らなければならないと存じます。（文四　鳥井、宇佐美、三浦）

Our birth is but a sleep and a forgetting:
The soul that rises with us, our lifes star,
Hath had elsewhere its setting,
And cometh from afar:
Not in entire forgetfulness,
And not in utter nakedness,
But trailing clouds of alosy do we come
From god, who is aur home:——Woodswath

傳說と文學

（第二十五學術談話會講演）

（一）

傳說と文學とは極めて深き關係を有するものにして、これを各方面に亘りて巨細に研究せば甚興深きものなるべし。されどここにはその範圍を限り、主として傳說が文學に入る經路につきて述べんとす。

太古原始の時代若干の人相集りて初めて一の團體を形成す。これ家族なり。更に家族は集りて部落をつくり、やがて村をなし、都市を營み、ここに社會的生活は始まるなり。　而してこれら團體は周圍の自然に關する神話的傳說英勇の事業などを述べたる傳說、或は可憐なる人の譚などを有するに至るものなるが、これらの傳說は何れの國にありても未だ文字なき時代にはただ語り傳へられたりしものにして、例へばかの「冬のものがたり」の語によりてあらはさるるが如く、古老等が冬の夜長を爐邊に子孫を集めてその家その地方その國土などの古き出來事を物語り、或はこれを音樂的に語る所の「話し手」とも稱すべき特別なる者をも生じ、これによりて次第に後世に傳へられたり。　我國に於ける狀態もこれと大差なかりしものなるべく、「語り部」とはこの「話し手」の稱なるべし。　古事記は稗田阿禮の聞き覺えゐたりし數多の舊說を、太安麿が書き綴りしものと傳ふ。　斯の如く何れの國にても傳說が文字を以つて誌さるるに至るまでには、多く舊傳說に通ずる人々の物語りとして傳へられ、儀式宴會等の折々にこれと關聯したる傳說がものがたらるるに及びて、自

から歌謠的韻律を帶び來り、或は又これに音樂舞踏をも伴ひ、または文學に開展するに至れるものなり。

その中特に文學の方面を見るに、たとへば萬葉集中傳說を材料とせるものありて、古事記風土記などに、散文的、叙事的にあらはれたるものは、こゝに於て詩人の情思によりて修飾を加へられ、叙事的叙情詩とも稱すべきものとなりて大いに文學的價値を增進せり。かくて詩化せられたる傳說はこれより更に一轉して物語りに發達するを見る。こゝにその長き發達の經路の中、傳說が文學に入る初めの形、即ち譚歌 Ballad に就きて、又その資料は便宜上萬葉集中に實例を求めてその經過の叙述を試んと欲す。

（二）

傳說が萬葉集に譚歌となりてあらはれしものを擧ぐれば種々ありと雖その主なるものにつきていへばこれを二つに分類することを得べし。その一を神仙譚歌とし、二を人事譚歌とす。

先づ神仙譚歌に屬するものにつきて述べんとす。凡そ神仙譚歌は仙女と人との物語りを嘗子とす。例へば仙柘枝の歌、浦島の仙女にあへる歌及竹取の翁の歌などあり。先づこれらの歌と傳說との關係及後世文學に推移せるさまを見む。

萬葉集卷三に仙柘枝歌「このゆふべつみのさえだのながれこはやなはわたずてとらすかもあらん。」又一首「いにしへに梁うつ人のなかりせば、こゝにもあらましつみのえだはも。」とあり。この歌は、「昔吉野に美稻あり。常に吉野川に梁をうち、鮎をとらへ世のいとなみしたり。或る日常の如く梁うちゐたるに柘枝流れ來りて梁にかゝりぬ。美稻これをもちかへりしにこの枝美しき女となりて乃夫妻の契を結び、老いず死せず住

みゐたりしが、遂に常世の國に飛び去りにけり。」と、かくの如き傳說の山部赤人によりて上述の二歌となりてあらはれたるものなり。これその一例にすぎざるも、我國に於ける傳說中には山間の池、溪川などにおける傳說の如きその數多くしていまなほ傳へられたるものなり。

次に浦島太郎につきては、桃太郎かち〳〵山などの話と共に小供らのよろこび耳かたむくるものなるが、もとは甚だ簡單なるものなり。奈良朝の元明天皇和銅六年（一三七三年）風土記の編纂ありき。この時播磨風土記中にこの話あらはれたり。勿論その以前、日本書記雄略天皇の卷、その他本朝神仙傳、元亨釋書などにあらはれざりしにはあらざれど、是等は各浦島の仙境にありし間を、百年或は三百四十八年、三百年などいひて各、異れり。而して風土記にあらはれたるもの、叙事精細にして浦島物語として後世作られしものゝもとをなせるが如し。されど話の筋書に至りては矛盾する點なきにあらず。然るに萬葉集中に譚歌としてあらはさるるや風土記とその趣を稍異にせり。即ち、

春の日のかすめる時にすみの江のきしにいていてつり舟のたゆとふ見ればいにしへのことぞおもほゆるみつの江の浦島の子がかつをつりたひつりほこりなぬかまでいへにもこずて海さかをすぎてこぎゆくにわたつみのかみのとめにたまさかにいこぎむかひあひかたらひことなりしかばかきむすびとこよにいたりわたつみのかみの宮のうちのへのたへなるとのにたつさはりふたりいりゐて老もせず死にもせずしてとこしへにありけるものを世の中のかたくな人の吾妹兒に告てかたらく須臾は家にかへりて父母に事をものらひあすのこと吾はきなむといひければいもかいへらくとこよにまたかへりきていまのごとあはむとならはこのくしけひらくなゆめとそこらくにかためしことをすみの江にかへり來りていへみれどいへもみかねてさ

とみれどさともみかねてあやしみとそこにおもはくいへよ出でみとせのほとにかきもなくいへうせめやも
このはこを開きてみてはもとのごといへはあらんとたまくしげすこしひらくにしらくもははこよりいでゝ
とこよへにたなびきぬればたちはしりさけびそでふりこひまろびあしずりしつゝたちまちにこゝろけうせ
ぬわかゝりしはだもしはみぬくろかりしかみもしらけぬゆり〳〵はいきさへたえてのちつひにいのち死に
けるみづの江のうらしまの子がいへところみゆ。

とありて、こぎいづる海は和ぎ、獲物は幸あり、氣のすゝむまゝに我を忘れて沖へ〳〵とゆくほどに、來し方は既に跡引く細漣も遙に連りて煙霞縹緲の間に入り往く。又をとめにあひて相かたらひ、後に故郷をしのびかへらんとするほどに匣を與へられ、家をいでゝ三年の間に家墻なきにおどろきて詮方なくて匣を開くところなど、叙事自然に、情思こまやかにあらはれたるが、この歌の前後の文學にあらはれし此話は多くこの萬葉集によらず、風土記の説によりて同一誤謬に陷り、加ふるに浦島子の性格をすら沒せるあり。平安鎌倉兩時代を經て足利時代に至りて御伽草紙に、

繪島ケ磯といふ所にて龜を一つあげて浦島太郎この龜にいふやう、汝生あるものゝ中にも鶴は千年龜は万年とていのち久しきものなり。たちまち茲にて命をたゝむことといたはしければ助くるなり。常にこの恩を思ひ出すべしとてこの龜をもとの海へかへしけり。云々、

といふを始めとして、

三年を送り候へば父母の御こと心もとなく候へば、あひ奉りて心やすく參り候はんと申しければ。云々、
二世の縁と申せばたとへこの世にてこそゆめまぼろしの契りにて候とも、必ず來世にてはひとつ蓮の縁と

うまれさせおはしませと、さめ〳〵となき給ひけり。云々。
今は何をかつゝみ候べき、自らはこの龍宮城の龜にて候ふが、繪島が磯にて御身に命をたすけられまゐらせて候其の御恩報じ申さんとて、かく夫婦とはなりまゐらせて候、又會者常離の習とて、あふものには必ず別るゝとは知りながら止めがたくてなん。云々。

と、さすがに支那、印度の儒佛思想加味せられ、因果の關係會者常離の説をとり教訓的にあらはされたり。王手匣を連結し、これらの諸説合して戯曲となるなど、種々の變遷をなせり。中にも德川時代にあらはれたる中島廣足の水江日記は、萬葉集の意を傳へ、暢やかなる物語文體を以つて綴られしものなり。これは浦島物語の最後にあらはれしものにて、しかも最も自然的のものなり。又萬葉集には浦島物語と幷びて、二大傳説ともいひうべき羽衣傳説といふあり。これは天女と人との關係によりて作られたるものにして、竹取傳記もこの中に入るべきものなり。萬葉集には單に竹取翁の天女にあひしこと、卽ち、

むかし翁あり。竹取翁といふ。この翁やよひばかりにをかに登りてくにみするとき、あつものを煮るこゝのをとめにあへり。きものゝこひたぐひなく、花のすがたならびなし。時にをとめ翁をよびてわらひてをちきてこの火ふけと、こゝに翁唯々といひてやゝゆきてしきゐのほとりにつきたり。しましありてをとめらみなともにしたえみあひをし、ゆづりらく、たれぞ翁をよびしや。すなはち竹取翁といふおもひの外にひじりにあひ、まどへる心たへがたし。ちかくなれしつみうたをもちてあがなひまふさむ。卽ちうたつ、またみぢかうた。

これを歌の序として作られたるものにして、これによりてありし傳説の樣もうかゞはるゝなり。卽ち竹取翁

翁といふの丘に登りて九人のをとめにあひ、姿みにくしと笑はれて翁自ら歌をよみてこれに答へたり。かくの如き趣向になれるものなるが、その大意は娘らが老翁の姿みにくしをかしとて笑ひたれば、老翁は昔のうるはしかりしさまを、みとりごの時より、若き頃の己のうつくしくめでたかりしことどもをのべ、ついに年老いて今はみにくき翁となりけり、御身らも年老いなばまた若き人々に笑はれんといふ意を、いと面白くうたひたるものなり。さてこの歌より直ちに聯想せらるゝは、かの物語のはじめといはるゝ竹取物語との關係は如何といふことなり。竹取物語は我國に於て始めてなされたる作り物語にして、千年以前にかくのごとき著述ありしは世界文學史上に於て珍らしきものと稱せらる。この物語は伊勢物語などゝ同じく平安時代の文學の特性をあらはし、一人の女をヒロインとしてその周圍の多くの男子との關係を叙したる物語にして、竹取物語はヒロインをかぐや姫として、その周圍の人々との關係を滑稽をクライマックスにかきあらはしたるものにて、かぐや姫は元、月の宮より來りしなるが、最後に宮仕へをも辭して天上に昇りたりといふ作り話なり。これその結構完備し、體裁整ひ、且つ滑稽の中に諷刺の意もみえ、又内容よりみれば種々の要素を結合したるものにして、前に述べたる萬葉集の竹取翁に比すれば内容に於てはこれと全く異れること明にして、物語の名を竹取といひ、又最初に『今はむかし竹取の翁といふものありけり』の句あるをみれば。竹取傳説及び萬葉集の竹取翁などと全く無關係なりとはいひ得べからざるなり。而して種々の支那印度の思想などを結合して複雜なるものとなりしが、その後に於ては大なる變化もなくて現代に至りて、坪内逍遙氏の新曲かくや媛となりてあらはれ、また劇として實演せられたり。純羽衣傳説は別に獨立の發達をなし、謠曲に入りて流麗なる筆致によりて詩化せらるるや、則ち後代文學を飾るに至れり。

(三)

次に萬葉集の人事譚歌につきて述べんに、これには眞情の迸りて情思の切々として人を動かすもの多し。今ここに到るまで人口に膾炙せらるる松浦佐用嬪を始めとして、櫻兒、縵兒、勝鹿眞間娘、菟原處女の歌につきて傳説との關係及びその推移を尋ねん。

松浦佐用嬪、傳説、人皇第二十八代宣化天皇の御代に、大伴狹手彦連をして任那國をしづめさせられたる事ありき。狹手彦は命を奉じて肥前國松浦郡に行きたりしがその篠原村に弟日姫といへる美しき少女ありき。狹手彦は遂に彼女と夫婦の契りを結びしが幾程もなくて任那の國に赴く時來りぬ。弟日姫は別を惜みて山に登り、舟の行く方わかずなるまで袖を振りつゝ立ちつくしたり。故にその山をひれふる山とは呼ぶなり。弟日姫は別にのぞみて狹手彦より鏡をわたされたるに遂にそを抱きて河に入りぬ。それより後その河を鏡の渡りと云ひ傳へぞ。かゝる傳説は山上憶良の「領布麾之嶺」の松浦佐用嬪の歌(卷五八)

とほつひと　まつらさよひめ　つまごひに　ひれふりしより　おへるやまのな

の歌となりぬ。

櫻兒の歌は、昔櫻兒と呼べる少女ありしが思ひあまりて遂に林に入りて玉の緒を絶ちぬ。このことを悲しみて思を述べし歌、

はるさらばかざしにせむとあかもひしさくらのはなはちりにけるかも。(萬十六卷)

妹が名にかゝせるさくらはなさかばつねにやこひむいやとしのはに。(同上)

縵兒、右の櫻兒と殆ど同樣なる内容にして縵兒となんいへる少女ありしが、これまた思に耽りて池のほとり

をさまよひたりしが遂に水底に沈んで終りぬ。人々は悲しさにたへず各々おもひをのべて詠みたる歌、

みみなしなしの池しうらめしわきもこがぎつゝかづかばみづはかれなむ。

あしびきのやまかつらのこけふゆくとわれにのりせばはやくこましを。

あしびきのやまかつらのこけふのごといづれのくまをみつゝきにけむ。（以上萬十六卷）

この縵兒の歌は平安朝に入りて大和物語の中にあらはれ、更に詳しき物語に生長したり。

次に勝鹿眞間娘子の歌は、昔下總國葛飾郡眞間に眞間娘子といへる美しき少女ありき。この少女賤家に生れしにも似ずそのかたちきらきらしかりしが、眞間の湊に身を投じて失せぬ、右の傳說によりて詠まれたる歌萬葉集中に見ゆる者三あり。その中虫麿作歌（萬九卷）左の如し。

とりがなくあづまのくにのいにしへにありけることをいままでにたえずいひくるかつしかのままのてこな

があさきぬにあをえりつけひたさををもにはおりきて云々。

反歌

かつしかのままの井みればたちならしみづくましけむてこなしおもほゆ。

菟原處女の歌は思ひわづらひて死せる處女の後を追ひて、血沼壯士はその夜のこと夢に見てつゝいて死し、菟原壯士も歎き悲しみたる末彼も亦後れじと小劍取佩きて後を追ひぬ。よりてこれらの親族の者打ちよりて永き後のしるしと、處女の墓を中に、壯士の墓をその兩側にたてたりと。

あしのやのうなひをとめのやとせこのかたおひのときよ云々。

反歌

あしのやのうなひをとめのおくつきをゆきくとみればねのみしなかる。

はかのべのこのえなびけりきゝしことをぬをとこにしよりにけらしも。（萬卷九）

斯くの如きは一例にすぎずと雖も、口々につたへられたる一つの傳說がつひには詩歌となり、更に物語にうつる推移のあとは、他の種々の傳說と文學との關係についてもいひ得るに似たり。

（四）

以上我が國の傳說中萬葉集の譚歌としてあらはれたるものの中の二三につきて、それが如何なる經路を經て文學に發達したるかを概觀せり。これを總括すれば、傳說は何れも始め口碑として傳はり、その間に韻律加はりて面白く歌はれたるものが文にかかれ、それが人文の發達と共にその時代の特殊の思想によりて解釋批評を加へられて複雜なるものとなり、文體は韻文より轉じて散文となり、或は謠物となり、或は演劇にまで推移するを見る。この現象は我が國の文學に於ても、外國のものにも適應し得る如く、かくして傳說が文學に入りたるもの頗る多し。而して傳說の發生は風土、氣候、民族など特有の地味背景を有す。從て傳說はその影響をうけて特別の傾向を生ず。たとへば北歐の如く、寒氣甚しく濃霧深くとざし、天地晦暝なる所に於ては、傳說も陰鬱にして恐ろしく凄じきもの多く、而して文學となりたる時には壯烈の感を與ふるものあり。これに反して地中海岸の風光明媚にして常に春の如くうららかなる日光輝く所には、明く美しく優しき傳說を的じて後世の文學をもこの方面へ推移せしめたり。我が國の傳說を思ふに、風土及民族の特色として、その傳說の背景には恐怖なく、憂鬱なし。我國の傳說は頗る樂天的にして光明的なり。我が國の風土がかくの如くしてまた斯の如き神話傳說あることを思へば、我が國民性も自然にその間に窺ひ知らるべ

し、しかるに斯の如き傳說が推移する中、悲觀的分子を含み來るは佛敎儒敎の傳來によりて印度支那の思想が混和せるによる。我が國民思想はこれらによりて開發せられたる所多しと雖も、この國土に傳へ來れる神話傳說の骨子は、自から國民の胸奥に共鳴するものあり。これら傳說神話に對する時、我が幼き昔をおぼろげに思ひ起す折の如き、一種抑へがたきなつかしさを覺ゆべし。我が國には未だ口碑として傳へらるゝ山、森、沼の傳說、又は何の山の話など各地方に多く行はれ、又美はしき壯烈なる無名の英雄の物語も山村、水郭到る所に口碑として物語らるゝあり。もしこれらを醇化せば少年少女の純潔なる心を養ふ物語をも得べく、又は國民文學の基礎たるべきもの亦少からじ。斯の如き方面も亦國民敎育上、三顧の價値ある問題たらんか。（文三　池田、山口、平山、土方、平山）

東京と地震（承前）

次に東京市街に於ける震度の分布について申上げます。一体地震の强さは地質構造や周圍の地形等に由つて定まるもので、特に地質構造に關係するものであります。今東京について見るに略三つの區域があるやうでございます。即ち、山の手と、下町と、埋立地とでございます。地震の强さは山の手を單位としますと、下町では約二倍、埋立地では約三倍と見てさしつかへないのでございませう。即ち、埋立地が地震に對して如何に弱いかゞわかります。

少し市内の埋立地について申上げませう。今の築地木挽町邊は慶長八年神田山、即ち、今の駿河臺の東南にありました山を崩しまして、南の入海三十餘町四方を埋立てゝ作つたのであります。築地といふ町の名は既にこれを證明して居ます。又佃島は寛永年代鐵砲洲向ひの干潟百間四方の地を、攝州佃村の漁夫に與へ、之を埋立てゝ其處に住まはせたものであります。又今の鳥越附近は、昔は鳥越山といはれた山でありましたが、正保二年崩して下谷邊を埋めました。又今の深川は、元、海中を埋めて拵へた小島でございました。慶長の頃までは半分以上は、芦その他の水草の生へて居る濕地でございましたが、德川氏が江戸に入りまして後、伊勢の人で深川八郎右衛門と申す者が此の地を開拓いたしました。それで此の人の姓を取つて深川と申すのだそうでございます。これは正保年代の圖を見ますとよくわかります。又萬治二年德川幕府が仙臺侯に